親鸞講座

22/6/18

◎仏説観無量寿経（現代の聖典）に学ぶ

法語1　浄邦縁熟して、調達（提婆達多）、闍世（阿闍世）をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり

1、愚かであることは当事者にはわからない、

お釈迦さまは、ここが機縁の熟したと見通された。悲劇が転じられて、韋提希夫人は浄土への道を歩まれることを選ばれた。それは韋提希夫人だけではなく、この物語に出てくるすべての人たちが歩まれる道でもあった。

2、苦しみや不幸の連鎖

自分にふりかかってくるさまざまな苦しみや不幸の原因自分以外の人や物やことがらにあるのだと責任転嫁をする。さらに、責任転嫁した人や物やことがらがに怒り、恨みをいだき、簡単に消えることはない。そしてその怒りや恨みがまた次の苦しみや不幸を生み出していく。

3、ただ人間として生きているだけでいいのでしょうか

仏教に教えられることがない限り、どこまでも好き勝手な思いで、傲慢にしか生きることができない。若いときは年長者に導かれて生きたとしても、ある程度以上の年齢に達すると、意見してくれる人がいなくなり、また意見されても聞けなくなってしまう。

私は人間として正しく生きてゆく道は、仏法を聞くほかはない。聞いても好き勝手にしか生きられない私ではあるが、唯一のブレーキは仏法しかない。そこにどれだけ深く帰依できるのか、仏教徒として、あるいは念仏者として問われていることでもある。

4、天上天下唯我独尊（お釈迦さまの生涯①）

自分に何かを付与し追加して尊しとするのではない。他と比べて自分のほうが尊いということでもない。天上天下にただ一人の、誰とも代わることのできない人間として、しかも何一つ加える必要もなく、この「いのち」のままに尊いということの発見である。生きとし生けるもの全ての「いのち」を、限りなくかけがえのないものとして尊ぶことから始まる。

5、あわれ、生き物は互いに食み合う（お釈迦さまの生涯②　下樹の静観）

鍬（くわ）を使って土を丹念に耕している者もいれば牛に鋤（すき）を引かせて土を起こしていく者もいる。裸の背には汗が流れ、その汗が乾いて白く塩を噴いたようになっていた。暑さに加えて朝早くから働きづめの牛はともすれば足が鈍って立ち止まろうとした。その牛を大声で追い立てる者も牛に劣らぬほど疲れ果てているのだった。土が起こされるにつれて土の中の虫たちが顔を出し、その虫たちをねらって鳥たちが舞い降りてくる。鳥たちは田に群がり、我先に虫をついばむのであった。